新漁業管理制度推進情報提供事業

（ 抄 録 ）

佐藤 晋一・田中 裕憲・黄金崎 栄一・高橋 進吾・今村 豊

漁 況

平成12年の漁況の特徴は全県的なマサバ、マイワシの引き続く不調、ブリ、タイ、ウスメバルの高水準であった。

マサバは八戸で前年の半分以下となった。陸奥湾内の平舘では約30トン、日本海側でも約10トンの漁獲がみられたが、依然低い水準にあった。

マイワシも八戸で過去15年平均の1%未満、平舘も過去15年平均の4%未満と不調であった。また、日本海側でも皆無状態となり、1985年以降では最低となった。

沿岸域におけるスルメイカ一本釣漁は日本海側では不調となったが、津軽海峡側及び太平洋側では回復の兆しをみせた。津軽海峡側では不調だった前年の209%、日本海側は57%、太平洋側では165%であったが、過去10年間平均値と比較すると51～86%と低調な漁獲が続いていた。海域別にみると日本海側では前年より2カ月遅い9月にピークをむかえたが、568トンとその山は小さかった。津軽海峡側では前年より1カ月早い7月にピークをむかえ、701トンの漁獲がみられた。漁期後半の11月にも764トンのピークがみられたのが特徴的であった。太平洋側の白糠では前年同様8月にピークをむかえたが、水揚量は360トンにとどまった。また、八戸でも前年と同じ8月に2,878トンのピークをむかえた。8月の水揚げとしては、前年の2倍以上にあたるものであった。

日本海のアブラツノザメは近年、低い水準にあるが、2000年は前年をやや上回った。日本海から津軽海峡の三厩にかけてのヤリイカ漁は前年を軒並み下回った（前年比13～95%）。津軽海峡の佐井から太平洋側にかけてのヤリイカ漁は前年をやや上回った（前年比109～172%）。

日本海のウスメバルはここ4ヶ年ほどの高い水準を維持していた。

日本海の定置網・底建網で漁獲されるマダイはここ3年間は漸減傾向にあったが、引き続き高い水準にあった。

主として定置網で漁獲される日本海のブリは前年より47トン少ない396トンが水揚げされ、引き続き高い水準を維持していた。

海 況

平成12年の青森県沿岸の海況は、日本海沿岸・沖合定線観測・太平洋沖合定線観測結果から求めた。対馬暖流（日本海）・津軽暖流（太平洋）の流勢指標を平年と比較することで表現すると次のとおりである。

1 日本海（観測月2～6月、8～12月、各月1回）

平成12年の青森県日本海沖合における対馬暖流域の水温は2～5月及び9月に高めで、その他の月はほぼ平年並みに経過した。対馬暖流の勢力は、定線観測結果によると4月から6月及び11月に強めとなっていた。4月以降の期間中は強め基調で推移し、特に5～6月は

発表誌名：平成12年度漁海況予報関係事業結果報告書（平成13年6月）青森県水産試験場

はなはだ強めとなっていた。

表面水温は３～９月ははなはだ高めから平年並みで推移した。50ｍ層水温も３～９月はかなり高めから平年並みで推移した。100m 層水温も高め基調で、５月、９～10 月及び 12 月はやや高めとなっていた。

100ｍ5℃等温線の岸からの位置で対馬暖流の流幅をみると、舳作崎線では２月から３月はやや狭め、４～６月はなはだ広め、８月やや広め、９月はなはだ広めとなった。また、十三線では３月にやや狭め、６月やや広め、９月やや狭め、10 月かなり狭め、11 月ははなはだ狭めとなった。

水塊深度を7℃等温線の最深度でみると、２～３月はかなり浅め、４月かなり深め、５～６月及び９月はやや深め、10 月やや浅め、11 月やや深め、12 月はかなり浅めと大きな変動をみせた。

対馬暖流の北上流量を水深 300ｍ層を無流面とした地衡流量でみると、４月及び６月はかなり多め、８月やや多め、９月にははなはだ多めとなった。その後平年並みだったものの、12 月にはかなり少なめとなった。

2　太平洋（観測月　3月、6月、9月、12 月、各月１回）

平成 12 年の青森県太平洋沖合における津軽暖流の勢力は、３～９月は総じて平年並みに推移した。12 月には各層最高水温は低めだったものの、張り出し範囲は広めとなっていた。

表面水温は６月及び９月にやや高めだったが 12 月ははなはだ低めとなった。50m 層水温及び 100m 層水温は３～９月は平年並みだったものの、12 月にははなはだ低めとなった。

津軽暖流の深さを尻屋崎線における 7℃等温線の最深度でみると、３月は平年並み、６月及び９月はやや浅め、12 月ははなはだ深めとなった。

津軽暖流の張り出し位置を尻屋崎線における 100m5℃以上塩分 33.7psu 以上の東端位置でみると、３月はやや西偏（弱め）、９月もやや西偏だったが、12 月にははなはだ東偏となった。

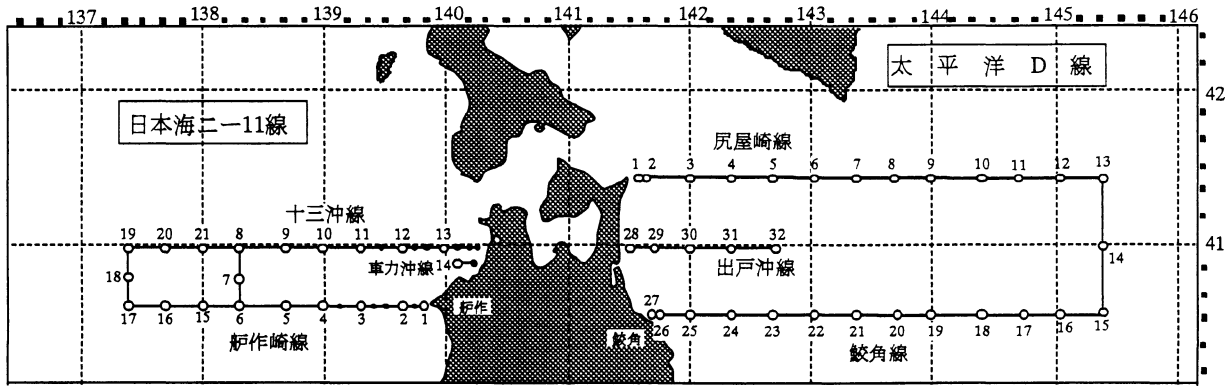


図1　太平洋及び日本海の観測定線

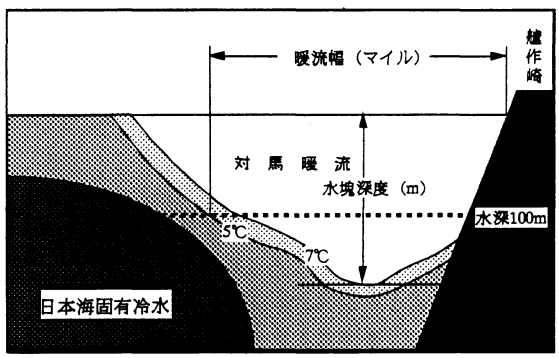


図2　炉作崎鉛直断面模式図

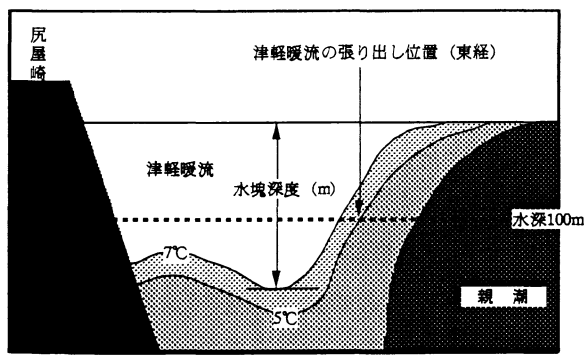
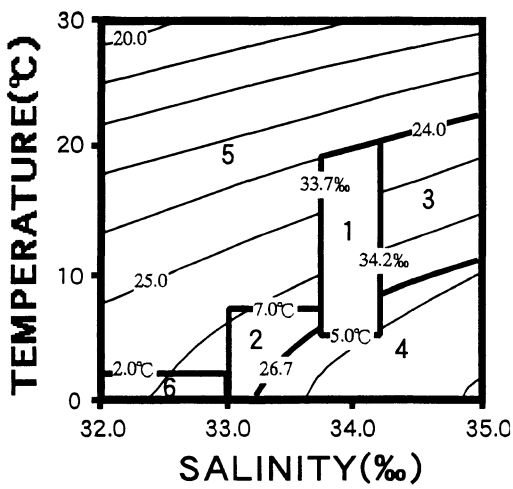


図3　尻屋崎鉛直断面模式図



1. 津軽暖流系水
2. 親潮系水
3. 黒潮系暖水
4. 底層冷水
5. 表層水
6. 沿岸親潮系水

図4　花輪、三寺（1986年）等の水塊分類法

津軽暖流水は塩分33.7～34.2psu、水温5℃以上、密度（σ t）24.0以下で規定される。

参考　平年比較の度合い（気象庁の海面水温偏差の階級区分を参考にした）

表　現	偏差比（標準偏差に対する割合）		
はなはだ高い	＋200％以上		（およそ44年に1回の発生に相当）
かなり高い	＋130％以上	＋200％未満	（およそ14年に1回の発生に相当）
やや高い	＋60％以上	＋130％未満	（およそ6年に1回の発生に相当）
平　年　並	－60％以上	＋60％未満	（およそ2年に1回の発生に相当）
やや低い	－130％以上	－60％未満	（およそ6年に1回の発生に相当）
かなり低い	－200％以上	－130％未満	（およそ14年に1回の発生に相当）
はなはだ低い		－200％未満	（およそ44年に1回の発生に相当）